

女子音樂教科書



教師用



編 共  
橋本 俊二 藤 内

大阪關成館版



羽衣

犬童 球 溪

一、白波寄せてはかへしかへして寄する

三保の松原いづこよりか靈香薫じ音楽聞ゆ

白龍これを怪み眺むれば 松にかゝる奇しき衣

風に揺る、怪しき衣、み神の給ふ寶はこれと

喜びつゝも衣をとりて去なむとするを

否とよそれその衣は 妾のものと天津乙女の

木蔭よりぞ現れ出でて取らむとすなる。」

二、白龍返しはやらで見る事難き

霓裳羽衣の舞を舞はゞ返さむものを天津乙女よ

羽衣身にまとはずば舞ひ難し 乙女乞ひて身にまとい

霓裳羽衣の舞を爲す もすそはかろく風にゆらめき

姿はいつか雲間に入りてそのかげ見えぬ

白波寄せては返し 返しては寄する三保の松原

いづこよりか靈香薫じ音楽聞ゆ。」

【大意】

一 讀意味が明白だから略する。

【語釋】

靈香

此の世ならぬ薫香。

取らむとすなる

「なる」は詠嘆。「あゝ」の意。

霓裳羽衣の舞

唐の明皇が月の都に遊んで、天人の音楽を聞き舞を見て歸つて来た。明皇が歸來して、天人の音楽に染つて作つた曲と舞とが此の霓裳羽衣の舞だと云傳へられてゐる。

紫式部

川路 柳 虹

一、仇に散る花影を傷み

さめて儚き夢を惜む

人の情世々の憂ひ

身にぞかなしく君歌ひぬ。」

二、月はいさよふ琵琶の湖べ

君は妙なる筆に記す

歌のことば文の言葉

源氏のながき物語。」

【大意】

一 櫻の花が徒に散つて行くことの寂しさを傷んだり、醒めては儚い夢のやうな人の世の儚さを惜しんだり、人情のつれなきや人の世の憂さを思つては、それを深く身に感じたりして、その人生の姿を紫式部が詩のやうな文章にうたひ出した。

二 月影がいつまでも徘徊してゐる琵琶湖、その湖畔の石山寺で、君、紫式部は歌に文に妙筆を揮つた。それが長篇源氏物語となつたのだ。

【語釋】

徘徊してゐる。

徘徊してゐる。

羽

衣

# 羽衣

Allegretto. スエーデン民謡

1. シラナーミヨセテハカヘシカヘシテヨスルミホノマツバ  
 ナトコソレソノキヌハワラハノモノトアマツヲトメ

2. はくはうかへしはやらでみるこどかたきげいしやうい  
 しらなみよせてはかへしかへしてよするみほのまつは

九四 (生徒用八二)

ラ イヅコヨリカレイキヤクンジ オンガクキコユ  
 ノ カゲヨリゾアラハレイデテ トラムトスナル  
 の まひをまはばかへさむものをあまつをさめよ  
 ら いづこよりか れいきやうくんじ おんがくきこゆ

ハクローウ コレヲアヤシミ ナガムレバ マツ  
 はころもみにまごはずば まひがたし をと

羽

ニカカルクシキキス カゼニユルルクシ  
 めこひてみにまごひ げいばうういのまひ

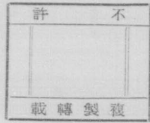
キキス ミカミノタマフー タカラハコレトヨロ  
 をなす もすそはかろくかせにゆらめきすが

九五 (生徒用八三)

コピツツモコロモヲトリテ イナムトスルヲ  
 たはいつかくもまにிரて そのかげみえす

K231,7

昭和八年六月廿五日印刷  
昭和八年七月一日發行



中等女子普通教科書教師用卷之三  
定價金壹圓五拾錢

編纂者 內藤 俊二

印刷者兼  
大阪市東區北久寶寺町四丁目四十五番地  
三木 佐助

發行所  
大阪市東區北久寶寺町四丁目四十四番地  
振替口座大阪七九番  
大成館

大阪市東區北久寶寺町心齋橋筋角

三木 樂器店

振替口座大阪七九番

東京市日本橋區吳服橋二丁目五

林平 書店

振替口座東京二二七一

發賣所